

『諫早湾干拓事業の公共性を問う』を読む

写真は宮入興一さんの新刊書。関心あるテーマなので一気に読んだ。寺西俊一・日本環境会議理事長も推薦している好著である。本書の目次は次の通り。

- 1 諫早湾干拓事業の概要と目的及び経緯
- 2 諫早湾干拓事業の公共事業としての正当性と合理性
—「費用便益分析」を中心に
- 3 諫早湾干拓事業をめぐる利権構造と癒着構造、草の根の事業依存体質
- 4 諫早湾干拓事業の推進のための財政負担転嫁構造
—県費・受益者負担から国費負担への付け替え
- 5 諫早湾干拓事業が生んだ環境悪化（「有明海異変」）と歪みの連鎖
- 6 諫早湾干拓事業の真の「環境再生」をめざして—有明海の「環境再生」の方向性



この目次からも、著者の問題意識や本書のねらい・目的が浮かび上がってくる。内容豊富なので、むすびの冒頭だけ紹介する。

諫早湾干拓事業は、工事としてはすでに2008年3月をもって終了しています。しかし、その後も「有明海異変」のような海洋環境の悪化と、開門をめぐる漁民の訴訟、それに反対する入植農民らとの「訴訟合戦」、さらに入植農民内部での対立まで引き起こしています。非開門の農民らの背後には、国（農水省）や長崎県・諫早市の行政当局、国・県・市の関係議員や一部学者と業界によって長期にわたり構築されてきた利権癒着構造の残りカスが根強くこびり付いています。

この残渣は、諫早湾干拓事業が生んだ「社会的費用」に免罪符を与えながら、他方では、「有明海再生事業」や「調整池浄化事業」のような「環境再生」の装いをまとった新規の公共事業をも蘇生させています。しかし、これらの事業も、真の有明海再生には繋がらず、むしろ長期的には環境破壊を深めてさえいます。重要なことは、諫早湾干拓事業とそれが生んだ「負の遺産」の総決算をして、その残りカスを取り除くとともに、諫早干潟と有明海の海洋環境の再生を実現し、その先に有明海周辺地域の経済社会の再生をも見通す、総合的な再生事業を立案し、実施することです。

著者の宮入さんとは、長いつき合いだ。本書巻末に、宮入さんの経歴や著書が詳しく紹介されているが、宮入さんは大阪市立大大学院で学ばれている。私が大学院「浪人」のとき、受験に向けてドイツ語などを一緒に勉強したことがある。研究科は違っていたが、二人とも同じ年に入学して、同じ年に就職できた。宮入さんは長崎大を拠点に災害などの調査研究を進め、愛知大に移ってから災害・公共事業など精力的に研究されてきた。その成果の一つが、諫早湾干拓の長年にわたる調査研究をまとめた本書である。

(2023年8月30日)